

裏山I遺跡 調査報告書

飯豊町教育委員会埋蔵文化財調査報告書第9集



2019年
飯豊町教育委員会



序

本書は飯豊町教育委員会が平成29年度に実施した裏山Ⅰ遺跡の発掘調査事業の成果を報告するものです。本事業は飯豊町が実施する開発行為に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査事業です。裏山Ⅰ遺跡は昭和51年の山形県の分布調査によって確認された遺跡で、縄文時代晚期の遺跡として位置付けられています。

平成27年度、裏山Ⅰ遺跡の所在地に西置賜行政組合消防署飯豊分署の建設と宅地造成が計画されたことから、飯豊町教育委員会と開発部局が協議・調整し、遺跡の範囲と状況を確認するための試掘調査を実施しました。その結果、開発範囲が周知の遺跡範囲にかかること、遺跡が検出される地層が宅地造成事業によって破壊されることを確認したことから、飯豊町教育委員会では当町における埋蔵文化財の保存と活用のために、当遺跡の記録保存の必要性を認識し、山形県教育庁文化財・生涯学習課へ文化財第92条に基づく「埋蔵文化財発掘調査の届出」を提出しました。届出が受理された後「埋蔵文化財の発掘調査について」の通知を受け取り、発掘調査を実施したものです。

飯豊町では文化財全般を対象とした保護、活用事業を積極的に進めており、埋蔵文化財についても、その把握と記録、町内外への情報の発信、活用を進める取組みを行っています。埋蔵文化財は、私たちの祖先が長い歴史の中で創造してきた貴重な地域財産です。この財産を大切に保護するとともに、そこから歴史を学び子孫へ伝えることが現代に生きる私たちの責務だと考えます。今後、本書が文化財の保護活動、学術研究、教育活動等に役立つことになれば幸いです。

最後に当調査にご支援ご協力いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

平成31年3月

飯豊町教育委員会

教育長 熊野 昌昭

例　　言

- 1 本書は、飯豊町教育委員会が実施した記録保存を目的とした緊急発掘調査の報告書である。
- 2 調査事業期間は平成29年5月10日から平成29年6月30日までである。
遺物の整理作業、報告書の製作事業期間は平成30年4月から平成31年3月までである。
- 3 調査体制は次のとおりである。
調査主体　飯豊町教育委員会　教育長　熊野昌昭
発掘調査・資料整理担当者
　　調　　査　　員　高橋　拓
　　発掘作業員　伊藤　憲之、井上　芳子、鈴木　昌利、高橋　純、土屋　秋夫（五十音順）
　　整理作業員　手塚　千栄美、長岡　千明（五十音順）
事務局　遠藤純雄（社会教育課課長H29年度）
　　後藤圭一（社会教育課課長H30年度）
　　伊藤敏英（社会教育課生涯学習振興室室長H29・H30年度）
　　佐原芳寿（社会教育課生涯学習振興室主事H29・H30年度）
- 4 調査並びに報告書作成にあたり、次の方々にご指導ご協力をいただきました。ここに記して感謝を申し上げます。
(五十音順、敬称略)　草野潤平、小林圭一、渋谷孝雄、菅原哲文、堀江格、山野井徹、山形県教育庁文化財生涯学習課
- 5 報告書の編集・執筆・写真撮影・挿図は高橋　拓が担当した。

凡　　例

- 1 本報告書の遺構図中の用例は以下のとおりである。
 - (1) 図中の方位記号が指示する方向が磁北を示す。
 - (2) 縮尺率はそれぞれ図中に示した。
- 2 本報告書の遺物の実測図中の用例は以下のとおりである。
 - (1) 原則は1/4で採録し、各々にスケールを付した。
 - (2) 遺物番号は、遺物図版・写真図版とともに共通のものとした。
- 3 遺構の写真図版については任意の縮尺とした。
- 4 土層の色調に関しては小山正忠・竹原秀雄編著『標準土色帳』(日本色研株式会社、1967年)を基準に視認している。
- 5 本書で使用した遺構・遺物を指示する略号は以下の通りである。
SK…土壤　P…ピット　SW…河川跡　SX…不明遺構　TR…トレンチ
C…土器　S…石、石器　W…木

目 次

1. 裏山 I 遺跡について	1
1 - 1. 遺跡の周辺環境	1
1 - 2. 裏山 I 遺跡の調査経緯	1
昭和51年～平成26年までの調査	
平成27年度の試掘調査	
平成29年度の発掘調査 発掘調査と整理	
作業の経緯	
2. 裏山 I 遺跡の基本層序	3
3. 遺構と遺物の分類基準	3
3 - 1. 遺構の分類	3
3 - 2. 遺物の分類	4
4. 各遺構と出土した遺物の説明	5
4 - 1. 土壙 (SK) について	5
4 - 2. ピット状遺構 (P) について	9
4 - 3. 河川跡 (SW) と不明遺構 (SX) について	9
4 - 4. その他 単独トレンチ (TR) と	
調査区壁について	10
5. まとめ	10
参考文献	12

挿図目次

図1	飯農町の位置	1
図2	裏山 I 遺跡とその周辺遺跡	1
図3	裏山 I 遺跡 調査区平面図	15
図4	裏山 I 遺跡 調査区北壁・南壁土層断面図	17
図5	裏山 I 遺跡 調査区東壁土層断面図	18
図6	裏山 I 遺跡 調査区西壁土層断面図	19
図7	裏山 I 遺跡 遺構土層断面図	20
図8	裏山 I 遺跡 遺構土層断面図・出土遺物	21
図9	裏山 I 遺跡 遺構土層断面図・出土遺物	22
図10	裏山 I 遺跡 遺構土層断面図	23
図11	裏山 I 遺跡 出土遺物	24
図12	裏山 I 遺跡 遺構土層断面図・出土遺物	25
図13	裏山 I 遺跡 遺構土層断面図・出土遺物	26
図14	裏山 I 遺跡 遺構土層断面図・出土遺物	27
図15	裏山 I 遺跡 遺構土層断面図	28
図16	裏山 I 遺跡 遺構土層断面図・出土遺物	29
図17	裏山 I 遺跡 遺構土層断面図・出土遺物	30
図18	裏山 I 遺跡 遺構土層断面図	31
図19	裏山 I 遺跡 トレンチ土層断面図	32

表目次

表1	裏山 I 遺跡周辺の遺跡一覧表	2
表2	遺物一覧表	13

写真図版

写真図版 1	34
写真図版 2	35
写真図版 3	36
写真図版 4	37
写真図版 5	38
写真図版 6	39
写真図版 7	40
写真図版 8	41

1. 裏山Ⅰ遺跡について

1-1. 遺跡の周辺環境



第1図 飯豊町の位置



第2図 裏山Ⅰ遺跡とその周辺遺跡

飯豊町は山形県の南西部に位置し、南は福島県の喜多方市と接する行政区域である。町域は南北に長く、南北最長部は35km、東西最長部は18km、総面積は329.41km²である。地質としては、先第三系に属する花崗閃緑岩を基盤として、南部には第三紀の地質の山地、北部には第四紀の地質の砂礫台地・段丘・扇状地が分布している。南部を中心とした山間地帯は町域の大半を占め、その南寄りにある飯豊連峰を源流とした白川が、町域を貫き北東に向かって流れている。白川流域は下流にいくにしたがい氾濫原が広がり、扇状地帯がみられるようになる。白川左岸の扇状地帯に位置する椿区には、長井盆地の北から盆地西縁、さらにもう一箇所に米沢盆地西縁まで分布する活断層である長井盆地西縁断層帯が南北にはしつけられている。裏山Ⅰ遺跡は、この断層の上に所在する。当地には昭和23年に創立した県立置賜農業高等学校飯豊分校があったが、2013年に本校と統合し、2015年に校舎も撤去されている。

飯豊町には70か所を超える遺跡が確認されているが、裏山Ⅰ遺跡が所在する長井盆地西縁断層帯の縁辺は遺跡の集中地帯で、飯豊町の遺跡の約14%が集まっている。特に縄文時代の遺跡が多数確認されており、飯豊町内の縄文時代の遺跡の約44%が集中している。このような状況からは、断層によってできた高台周辺に縄文の集落が好んで営まれていたことが推測できる。近隣には郡の神遺跡、上野遺跡、裏山Ⅱ遺跡、裏山Ⅲ遺跡、新山遺跡など縄文時代の遺跡が分布しており、郡の神遺跡からは弥生土器も出土している。

1-2. 裏山Ⅰ遺跡の調査経緯

昭和51年～平成26年までの調査

裏山Ⅰ遺跡は山形県教育委員会が昭和51年（1976）に実施した分布調査によって確認された遺跡である。調査員の平吹利數氏と海野丈芳氏が置賜農業高校分校のグラウンド地点で石皿や石槍を探取し、縄文時代晚期の遺跡として位置付けられている。

昭和52年（1977）には近隣の郡の神遺跡において、県道新設工事に伴う調査範囲1,049m²の第1次緊急発掘調査が実施され、

また平成4年度には第2次緊急発掘調査として1,600m²の範囲が調査された。郡の神遺跡では土壙、墓穴、柱穴などの遺構が約200基程度確認され、多数の石器と土器が遺物として出土した。土器型式から縄文前期から後期の遺跡であることが推定され、縄文時代の長い期間にわたって、当地に集落があったと認識された。

平成27年度の試掘調査

平成27年度、当地に総面積19,809m²に及ぶ西置賜行政組合消防署飯豊分署の建設と宅地の造成が計画されたことから、飯農町教育委員会が開発予定地全域で試掘調査を実施した。遺跡範囲の東側に位置する長井盆地西縁断層帯に対して直角に、つまり東西方向に10本のトレンチを設定し、各トレンチを掘り下げた結果、開発地の西では表土直下から地山が確認された。表土直下から地山が検出される場所は広域に及んでおり、遺跡範囲の大部分の遺構、少なくとも1/3以上が掘削によって破壊されていることが理解できた。飯農町は、白川だけではなく、白川に向かって流れる複数の川によって扇状地が形成され、西側から東側に向けて傾斜した地形となっている。試掘の結果からは、かつてここに県立置賜農業高等学校飯農分校を建設する際に平場を設ける必要性があり、より高い斜面を掘削し、より低い斜面へ土を移動させて平場を形成したことが考えられた。遺跡の破壊はこの整地によるもので、昭和51年に採取された遺物はこの掘削により表土に表れたものだと想定できる。トレンチの壁面の土層からも遺構確認面が東から西に向けて傾斜して高くなっていくことが理解でき、当地の旧地形に対する理解の助けとなつた。対して現地東側の断層沿いに設定したトレンチからは複数の土壙が検出された。試験的に土壙を一基掘削したところ、縄文土器の破片、貝殻の剥片、意図的に埋納したとみられる大きな礫が出土した。結果として断層に沿って縄文期の遺構が残存していること、場所によって遺構が表土直下に位置していることが分かり、この遺構の残存部において開発が行われる際、遺構が破壊されることになるため、記録保存を目的とした緊急発掘調査が必要になると判断された。

平成29年度の発掘調査

発掘調査と整理作業の経緯

平成29年度、西置賜行政組合消防署飯農分署と宅地造成の両計画が現実化したことから、飯農町教育委員会が開発部局と協議・調整し、記録保存を目的とした緊急発掘調査を実施することになった。

平成29年4月12日に関係者立会いのもと現地確認を実施し、4月20日に調査範囲の表土上面に敷かれていた碎石を重機によって除去した。5月10日から裏山Ⅰ遺跡の調査に着手し、5月11日にかけて重機を用いた表土の掘り下げ作業を行った。5月12日より遺構確認作業と調査区の壁面土層の調査作業を開始。5月17日より遺物を取り上げながら遺構の半裁作業を進めた。また並行して土層断面図を作成すると共に、遺構の半裁状況の写真記録を実施した。5月27日、飯農町の中部公民館との共同事業として遺構を半裁した状況で子供達の遺跡発掘体験事業を実施した。5月27日より6月17日にかけて遺構の全掘作業を実施。平行して遺構完掘状況の写真撮影と調査区の平面図を作成。6月26日にかけて現場の後片付け、調査道具の引き上げ。6月27日、調査終了後の発掘現場で飯農第二小学校の子供達へ遺

No	遺跡名	年代
403-002	契約壇遺跡	縄文中期
403-003	野山Ⅰ遺跡	縄文時代
403-005	沼之尻遺跡	縄文時代
403-006	環場遺跡	縄文晩期
403-008	郡の神遺跡	縄文時代
403-014	町下遺跡	縄文時代
403-032	長者原遺跡	縄文時代
403-037	裏山Ⅱ遺跡	縄文晩期
403-039	裏山Ⅲ遺跡	縄文時代
403-040	野山Ⅲ遺跡	縄文時代
403-041	才先林遺跡	縄文前期
403-042	横山遺跡	縄文前中期
403-044	野山Ⅱ遺跡	縄文前期？
403-048	下野遺跡	縄文中期
403-053	椿館	
403-055	野山Ⅳ遺跡	縄文時代
403-058	裏山Ⅰ遺跡	縄文晩期
403-061	野山Ⅴ遺跡	縄文中期？
403-066	上野遺跡	縄文時代
403-068	新山遺跡	縄文時代
403-069	椿古館	
403-072	椿焼裏山窯跡	近世

第1表 裏山Ⅰ遺跡周辺の遺跡一覧表

跡の説明会、遺構に入るなどの体験学習を実施。6月28日～6月30日にかけて重機による埋め戻しを行った。

平成30年度、整理作業と報告書の作成作業を開始。他の文化財業務の合間に作業を進めた。平成30年7月に遺物の洗浄。10月から12月に土器の実測図、拓本を作成し、12月に各図面のデジタル化を行う。2月から3月に報告書を作成した。

2. 裏山I遺跡の基本層序（図4～6参照）

調査区の北壁、南壁、東壁、西壁の層序を確認し実測図を作成した。この調査結果から当調査区における土層の基本層序を提示することができる。部分的に覆土が数層に分層できる場所、遺構が所在することから土層が複雑化している場所もあるが、基本的には表土層、整地層、覆土、地山の順に堆積している。ただし覆土がクロボク土の混在程度によって2層に分層できることから全5層に分層した。

- 1層 表土層。10～15cm堆積する薄い表土層である。
- 2層 整地層。場所により層の厚さが異なる。調査区西側は薄く、東側では厚い。地山ブロックの混入具合と土の締まりから、この層は置賜農業高等学校を建設する際の整地層だと判断する。地形が高い西側から土を削りとり、東側に運び低所を埋め立てた痕跡だと考える。よってこの層には遺物が混入する。おそらく調査区の西側にあった遺構に伴う遺物が、整地の際に流れ込んだものだと考えられる。3層との間に整地当時の表土が薄く認識できる。比較的均質で直径1cmを超える礫の混入は少ない。
- 3層 覆土。3層上面が遺構確認面である。黒色土の、いわゆる「クロボク土」が混在する層である。比較的均質で直径1cmを超える礫の混入は極めて少ない。
- 4層 覆土。3層と同様の覆土である。黒色土の、いわゆる「クロボク土」が主体となる層である。比較的均質で直径1cmを超える礫の混入は極めて少ない。
- 5層 地山。比較的均質で直径1cmを超える礫の混入は極めて少ない。5層上面に西から東に流れたことが推測される河川の跡が確認できる。ただし河川堆積による礫層は直径1cmの大いな小礫が主体となり、地山上面から20～30cm掘り込むと直径がやや大きい礫層が検出できるものの、それでも直径1～3cm大、例外的に5cm大の礫を含む程度である。よって当調査区内の遺構から検出される一程度以上の大きさの礫は、流れ込みなどで自然に入り込むことは考えにくい環境にある。

3. 遺構と遺物の分類基準

3-1. 遺構の分類

平成29年度の裏山I遺跡の発掘調査において検出された遺構をその特徴によって分類する。

土壤 (SK) 発掘調査の際に確認された遺構のうち、人間が掘つてできた穴で平面形が円形や梢円形を呈し直径が比

較大的形のものを土壤とした。また本報告では土壤をその形態的特徴からA、B、C群に細分して報告する。

A群：平面形が不整の楕円形を呈し100cm程度の深さを有する土壤。底部中央に円形のピット状の痕跡が見られるものが多い。ピット状の痕跡は杭の打ち込み痕だと認識され、一般的に穴を捉えるための罠だとして「落とし穴」という名称で認識される。

B群：平面形が円形、もしくはやや楕円形を呈する土壤。

C群：平面形が円形を、断面形がラスコ状を呈する土壤。一般的に「貯蔵穴」として、食料などを貯蔵した痕跡だと認識されている遺構に類する。底の中央部が円形に浅く掘り込まれるものが多く、これは水抜きの工作だと考えられている。調査区南側に集中する。

ピット（P） 発掘調査の際に確認された遺構のうち、人間が掘ってできた穴で平面形が円形や楕円形を呈し直径が比較的小さい遺構をピットとする。一般的に柱穴や杭の打ち込みの痕跡だと認識される遺構に属する。調査区北部に集中する。

河川跡（SW） 自然河川の跡を河川跡とする。

不明遺構（SX） 平面形体が不整形であったり、覆土が極めて不安定な遺構について不明遺構とする。

3-2. 遺物の分類

遺物としては明確に加工痕・生産痕・使用痕が確認できる土器・石器が出土している。またその他に加工痕・使用痕が明確ではない一定度の大きさの凹磨度の高い縛や破砕縛が出土している。前章で述べたように、当遺跡は一定度の大きさの縛が自然に入り込むとは考えにくい環境にある。よってこれらの縛を積極的に遺物として認識し分析を加えた。それぞれの遺物については、さらに法量によって細分し分析を行っている。

土 器 土を練って成形し、素焼き状態に焼き固めた器や道具を土器とする。土器片の内、平面の面積が8×8cm以下の大きさの破片を小破片、9×9cm～20×20cmの破片を中破片、21×21cm以上の破片を大破片に細分する。

本文中に提示する土器型式については、次の特徴をもって同定する。

- ① 大木10式新段階土器は、隆起線や沈線で区画文を施す。無文部が横S字状にやや流れの構成で、刺突はほぼ見られない。隆帯文や無文部の調整が丁寧な傾向がある。縄文中期前葉の遺物だと認識する。
- ② 称名寺式・袖窓式並行段階の土器は、隆起線や沈線で区画文を施す。無文部が直角状の方形区画で、隆帯や円形の貼り付けの上に円形の刺突や連続した刺突の列が見られる。隆帯文や無文部の調整が粗雑な傾向がある。関東の称名寺式、東北太平洋側の袖窓式、新潟の三十畳場式と同じ縄文後期初頭の遺物だと認識する。
- ③ 三十畳場式土器は、器種は菱形を基本として爪形文や突刺文を施す。口縁部に無文帶が多く、その間に橋状取手がつけられる個体がみられる。縄文後期初頭の遺物だと認識する。

さらに後期前葉だと認識する土器は関東の堀之内1式～2式、東北の南境1式～2式、新潟の南三十畳場式に平行すると理解する。

また型式を明確化できない土器片でも、部分的な情報をもとに時期推定が可能な資料もある。このような資料については次のような特徴から時期を提示した。撲糸文が見られる土器は、大木10式新段階から後期初頭及び後期前葉の南境1式に多いという理解から縄文中期～縄文後期前葉と提示する。下部を無文にする様式は同じく縄文中期～縄文後期前葉。無文部を主体とした文様の展開手法と刺突文が見られる特徴、口縁部が無文でねじれたような突起が付く特徴は後期初頭と認識した。副次的な特徴としては、隆帯の調整が離で荒い弧状の条線が見られるような特徴は後期初頭、細く雑な沈線が見られるものは後期初頭～後期前葉頃の特徴だと理解した。

- 頁 岩** 堆積岩の一種で、堆積面に沿って薄く層状に割れる性質を有するものを頁岩とし、これを人為的に割ったと推定される破碎片を剥片とする。長辺が3cm以下の大きさの剥片を小剥片、4cm～8cmの剥片を中剥片、9cm以上の剥片を大剥片に細分する。
- 礫** 円磨度の高い石を礫とする。破碎面を有するものであったとしても、その面が円磨されていれば礫に分類する。長辺が8cm以下の大きさの礫を小礫、9～15cmの礫を中礫、16cm以上の礫を大礫に細分する。
- 破 碎 磨** 削れた礫の内、破碎面が全く円磨されていない礫を破碎礫とする。法量による分類は礫と同じである。
- 磨製石斧** 人為的に磨いて滑らかに仕上げたと判断される斧形の道具。
- 石 盒** 盒形の礫。一般的に穀物や木の実を磨り潰す目的で使用された道具だと推定されている礫。
- 円盤状石製品** 人為的に円盤状に加工された石製品。
- 炭 化 物** 年代測定を行う必要性が発生したときに備えて試料として採取した。本調査では年代測定は行っていない。

4. 各遺構と出土した遺物の説明（図3、図7～18参照）

前章において提示した遺構と遺物の分類基準に従って、各遺構の調査結果を説明する。遺物が出土した遺構については遺物についての解説を行う。

4-1. 土壙（SK）について（図7～17参照）

SK1（図7）

B群に分類される土壙である。覆土にクロボク土が混じる。平面形は直径約110cmの円形で、遺構確認面から遺構底面までは約30cmである。土器の小破片が7点出土した。全て胴部である。頁岩の小剥片が2点出土した。炭化物を採取した。

SK2（図7）

A群に分類される土壙である。覆土にクロボク土が混じる。平面形は長径約135cm短径約55cmの楕円形で、遺構確認面から遺構底面まで約50cmである。底面に直径15cm大の杭などの打ち込み痕と推測される遺構が確認できる。遺物は出土しない。

SK3（図7）

A群に分類される土壙である。覆土にクロボク土が混じる。平面形は長径約120cm短径約60cmの楕円形で、遺構確認面から遺構底面まで約85cmである。底面に直径15cm大の杭などの打ち込み痕と推察できる遺構が確認できる。遺物は出土しない。

SK4（図7）

A群に分類される土壙である。覆土にクロボク土が混じる。平面形は長径約120cm短径約60cmの楕円形で、遺構確認面から遺構底面まで約90cmである。SK2、SK3に見られた底面の円形の痕跡は明確に確認できなかった。遺物は出土しない。

SK5（図8）

B群に分類される土壙である。覆土にクロボク土が混じる。平面形は直径約70cmの円形で、遺構確認面から遺構底面まで約55cmである。

土器の小破片が27点出土した。内、口縁部2点、底部1点、残りは全て胴部である。最低でも3個体の土器の破片が認識できる。破片2点が接合するものが2組。その他に小破片13点と中破片3点が接合し、器形が把握できる大きな破片となったものが1組ある。口縁部の破片には大木10式土器に後続すると見られる称名寺式・袖窓式に平行する土器だと認識されるものがあった(図8-2・3)。三十稻場式土器と認識される破片を含む(図8-4)。円磨度の高い繩が11点出土した。内1点は石英、1点は球状の繩で敲石として利用された可能性を提示できる。破碎繩としては小繩26点が出土した。内2点が結合した。中繩が3点、大繩が1点である。最低でも9個体が認識される。変色した個体が多く、被熱によって割れたことが想定される。その他8.5×2.3×4.5cm大の磨製石斧が1点出土した(図8-1)。炭化物を探集した。

SK6 (図7)

B群に分類される土壤である。覆土にクロボク土が混じる。平面形は直径約100cmの円形で、遺構確認面から遺構底面まで約15cmである。土器の小破片が4点出土した。全て胴部である。頁岩の小剥片が1点出土した。砂岩と見られる破碎した小繩が2点出土した。

SK7 (図7)

B群に分類される土壤である。覆土にクロボク土が混じる。平面形は直径約65cmの円形で遺構確認面から遺構底面まで約15cmである。土器の小破片が2点出土した。1点は口縁部、1点が胴部である。円磨度の高い小繩が2点出土した。

SK8 (図8～9)

B群に分類される土壤である。平成27年度の試掘において試験的に掘り込んだ遺構である。10・11層以外は平成27年度に埋め戻した土である。覆土にクロボク土が混じる。平面形は長径約180cm短径約90cmの橢円形で、遺構確認面から遺構底面まで約60cmである。遺構底面に直径約25cmのへこみが設けられている。ややオーバーハングする形状から、C群の貯蔵穴だった可能性が考えられるが、平面形状が橢円形であることが不自然である。可能性として、本来2個の切り合った遺構であったが、平成27年度の試掘の際、切り合いに気付かず2つの遺構をまとめて掘り下げてしまった可能性が高い。

土器の小破片が78点、中破片が3点出土した。内、口縁部17点、底部2点、その他は全て胴部である。中破片の口縁部資料には梳状取手を伴う個体があり繩文後期前葉と考える。破片が5点接合するものが4組、3点接合するものが4組、2点接合するものが4組ある。最低でも4個体の土器の破片が認識できる。大木10式土器新段階か、それに後続すると考えられる称名寺式・袖窓式に平行する土器(図8-7・8、図9-14)と認識される破片を含む。後期初頭と見られる土器片(図9-15)、蓋形土器(図8-11、図9-12)を含む。

頁岩の中剥片が5点出土した。円磨度の高い小繩が18点出土した。内石英1点、珪化木が1点確認できる。また砂岩や火成岩など多様な繩が出土する。円磨度が高い大繩が1点(図9-18)出土した。その他に敲石とみられる直径約8cmの球形の繩と3.5×0.7×5.2(断面)cm大の折れた板状の繩(図9-17)が出土した。破碎した小繩が5点出土、内一つに被熱痕がみられる。炭化物を探取した。

SK9 (図9)

B群に分類される土壤である。覆土にクロボク土が混じる。平面形は直径約120cmの円形で遺構確認面から遺構底面まで約40cmである。ややオーバーハングする形状であることからC群に属する遺構の可能性がある。

土器の小破片が37点、中破片が10点出土した。内、口縁部が7点、その他は全て胴部である。破片が7点接合するものが1組、5点接合するものが1組、3点接合するものが3組、2点接合するものが2組あった。最低でも3個体の土器の破片が認識できる。7点接合、5点接合、3点接合した土器片のそれぞれ1組ずつ、器形が把握できる大きな破片となった。大木10式土器に後続すると見られる称名寺式・袖窓式に平行する土器(図9-21・23・24)だと認識される。頁岩は小剥片が2点、中剥片が4点出土した。円磨度の高い小繩が1点、破碎した小繩が4点出土した。破碎した繩

には被熱痕が確認できる。その他、敲石とみられる $5.2 \times 2.2 \times 11.5$ （断面）cm大の棒状の礫（図9-20）と、直径5.8cm×厚さ1cmの人為的に打ち欠いたとみられる円盤状の礫（図9-19）が含まれる。炭化物を採取した。

SK10（図10）

B群に分類される土壤である。覆土にクロボク土が混じる。平面形は長径約110cm短径約100cmのやや楕円形で、遺構確認面から遺構底面まで約30cmである。土器の小破片が1点。円磨度の高い中礫が1個出土した。

SK11（図10）

A群に分類される土壤である。覆土にクロボク土が混じる。平面形は長径約120cm短径約80cmの楕円形で、遺構確認面から遺構底面まで約80cmである。遺物は出土しなかった。SK10を切ることからSK10より新しい遺構であると判断する。

SK12（図10～11）

C群に分類される土壤である。覆土にクロボク土が混じる。平面形は直径約120cmの円形で、遺構確認面から遺構底面まで約55cm、地表から遺構底面まで約110cmである。また覆土に大きな地山ブロックが含まれる。これはプラスコ状遺構の縁の部分が崩落したものだと判断する。

土器の小破片が106点、中破片が8点出土した。内、口縁部が14点、底部が3点、その他は胴部である。7点の破片が接合するものが1組、6点接合するものが2組、4点接合するものが1組、3点接合するものが2組、2点接合するものが9組ある。6点接合した資料は器形が把握できる大きな破片となった。大木10式新段階の土器（図11-25）と、大木10式土器に後続すると見られる称名寺式・袖窓式に平行する土器と認識される破片（図11-32）を含む。全体的に中期から後期初頭の土器（図11-31・38）が含まれる。頁岩の小剥片が3点、中剥片が8点出土した。円磨度の高い小礫が16点出土した。内、石英、珪化木、円盤状の礫が1点ずつ含まれる。破碎した小礫は25点出土した。赤色の小礫が1点含まれる。また一部の個体に被熱痕が見られることから、熱で破碎した可能性が考えられる。熱で破碎したと見られる破碎小礫が数点接合した。その他に敲き石とみられる $6.8 \times 1.0 \times 9.3$ （断面）cm大の楕円形で板状の礫（図11-39）が含まれる。炭化物を採取した。

SK13（図10）

B群に分類される土壤である。遺物は出土しなかった。覆土にクロボク土が混じる。平面形は直径約110cmの円形で、遺構確認面から遺構底面まで約20cmである。

SK14（図10）

B群に分類される土壤である。覆土にクロボク土が混じる。平面形は長径約90cm短径約60cmの楕円形で、遺構確認面から遺構底面まで約25cmである。土器の小破片が4点、中破片が1点出土した。全て胴部である。内、小破片3点が接合するものが1組あった。

SK15（図12）

B群に分類される土壤である。覆土にクロボク土が混じる。平面形は直径約50cmの円形で、遺構確認面から遺構底面まで約35cmである。土器の小破片が29点、中破片が3点出土した。内、口縁部を2点含む。他はすべて胴部である。5点の破片が接合するものが1組あった。大木10式土器に後続すると見られる称名寺式・袖窓式に平行する土器と認識される破片（図12-41・42）を含む。

頁岩の小剥片が5点、中剥片が12点出土した。内、搔器の破片（図12-46）が1点含まれる。円磨度の高い小礫が5点、中礫が3点出土した。破碎した小礫が4点、 $12 \times 16.2 \times 8.8$ cmの大礫（図12-43）が1点出土する。大礫の端部には繰り返し打ちつけたような瑕がみられる。その他、割れた敲石とみられる $14 \times 7.2 \times 5.8$ （断面）cm大の棒状の礫（図12-44）と、 $14.4 \times 5.8 \times 1.2$ （断面）cm大の楕円形で板状の礫（図12-45）が含まれる。

SK16（図13）

B群に分類される土壤である。覆土にクロボク土が混じる。平面形は直径約120cmの円形で、遺構確認面から遺構底

面まで約40cmである。土器の小破片が10点出土した。全て胴部である。頁岩の小剥片が1点出土した。

石皿に類する調理具に使用されたと見られる29.7×20.4×3cm大の円磨度が高い板状の礫（図13-47）が出土した。一部破碎しており、表面に被熱痕がみられる。割れた小礫が21点、割れた中礫が5点、割れた大礫が6点出土した。これらは表面の状況から被熱によって破碎した可能性が高いと考えられる。5点接合した破片が1組、2点接合した破片が2組ある。最低でも2個体の破片が含まれている。

SK17（図12）

B群に分類される土壤である。平面形は長径約120cm短径約100cmのやや楕円形で、遺構確認面から遺構底面まで約65cmである。土器の中破片が1個出土する。底部の破片である。

SK18（図13）

A群に分類される土壤である。覆土にクロボク土が混じる。長径約110cm短径約40cmの楕円形で、遺構確認面から遺構底面まで約55cmである。遺物は出土しない。

SK19（図13）

B群に分類される土壤である。平面形は直径約120cmの円形で、遺構確認面から遺構底面まで約50cmである。

土の締まりが極めて弱く、腐敗した木片、杉皮が出土する。現代遺構だと判断する。遺物は出土しなかった。

SK20

B群に分類される土壤である。平面形は直径約120cmの円形である。土の締まりが極めて弱くSK19と類似する。現代遺構だと判断した。未掘。

SK21

B群に分類される土壤である。平面形は直径約110cmの円形である。土の締まりが極めて弱くSK19と類似する。現代遺構だと判断した。未掘。

SK22（図14）

C群に分類される土壤である。覆土にクロボク土が混じる。平面形は直径約90cmの円形である。遺構確認面から遺構底面まで約70cmである。覆土に大きな地山ブロックが含まれる。これはフ拉斯コ状遺構の縁の部分が崩落したものだと判断する。

土器の小破片が32点出土した。口縁部2点、底部4点を含む。その他は全て胴部である。大木10式土器に後続すると見られる称名寺式・袖窓式に平行する土器と認識される破片を含む。三十櫛場式土器だと認識される破片を含む。

頁岩の小剥片が6点、中剥片が3点含む。その他メノウの小剥片が1点出土した。円磨度の高い小礫が15点出土する。内、円盤状の礫が4点（図14-49）、球状の礫が3点、 $7.5 \times 3.3 \times 0.5$ cm大の板状の礫を1点含む。高さ16.2cm、幅15.5cmの三角錐状の礫岩の大きな礫（図14-48）が出土した。表面に一部が欠落したためにできた穴が1つある。全面的に円磨度が高く使用痕は認識できない。

SK23（図14）

C群に分類される土壤である。覆土にクロボク土が混じる。平面形は直径約80cmの円形である。遺構確認面から遺構底面まで約75mである。覆土に大きな地山ブロックが含まれる。これはフ拉斯コ状遺構の縁の部分が崩落したものだと判断する。

土器の小破片が5点出土した。全て胴部である。頁岩の小剥片が1点、中剥片が2点出土した。円磨度の高い小礫が1点、円磨度の低い中礫が1点出土した。破碎した小礫が4点出土した。内2個は同一個体だと推測される。

SK24（図15）

A群に分類される土壤である。覆土にクロボク土が混じる。平面形は直径約100cmの円形である。遺構確認面から遺構底面まで約100cm以上ある。遺物は出土しなかった。

SK25 (図15)

A群かB群に分類される土壤である。覆土にクロボク土が混じる。平面形は直径約60cmの円形である。遺構確認面から遺構底面まで約105cmである。遺物は出土しなかった。

SK26 (図16)

B群に分類される土壤である。覆土にクロボク土が混じる。平面形は直径約110cmの円形である。遺構確認面から遺構底面まで約75cmである。遺物は出土しなかった。

SK27 (図16)

B群に分類される土壤である。覆土にクロボク土が混じる。平面形は直径約160cmの円形である。遺構確認面から遺構底面まで約65cmである。

土器の小破片が46点出土した。口縁部6点、その他は全て胴部である。破片が5点接合するものが1組、3点接合するものが1組、2点接合するものが1組ある。三十種場式土器だと認識される破片（図16-52）が主体となる。同型式の蓋（図16-53・54）が出土した。円磨度の高い小礫が11点出土した。おそらく被熱を原因として触っただけで粉化する脆い砂岩状の礫を含む。割れた小礫が10点出土した。割れた小礫内の1点には被熱した痕跡がみられる。炭化物を採取した。

SK28 (図17)

細分不可能な土壤である。覆土にクロボク土が混じる。平面形は長径約70cm短径約60cmのやや楕円形で、遺構確認面から遺構底面まで約45cmである。遺物は出土しない。SK27の一部、もしくはSK27と切り合う遺構であるが切り合ひ関係は把握できなかった。

SK29 (図17)

B群に分類される土壤である。平面形は直径約80cmの円形である。遺構確認面から遺構底面まで約40cmである。土器の小破片が42点、中破片が1点出土した。内、口縁部が2点、底部が6点、その他は胴部である。9点の破片が接合したものが1組、4点接合したものが1組、2点接合したもののが1組ある。称名寺式・袖窓式に平行する後期初頭の土器片だと認識される破片（図17-56・59）を含む。三十種場式土器だと認識される破片（図17-58）を含む。円磨度が高い小礫が7点出土した。内1点は直径約1.2cmの黒曜石である。ちなみに飯豊町の萩生区の高野から、直径1cm程度の黒曜石の原石が多数採集されることが秦昭繁氏によって報告されている。

4-2. ピット状遺構 (P) について (図17~18参照)

P1~P6

全て類似した形状で、遺物が出土しなかったことからまとめて報告する。覆土にクロボク土が混じる。平面形は直径約15cm~50cmの円形である。遺構確認面から遺構底面まで約15~25cmである。土層断面に柱の痕跡が確認できるものはなく柱穴ではないと判断する。覆土にクロボク土は含まれるものSK19~SK21に類する置賜農業高等学校に関わる近現代遺構の可能性が高い。

4-3. 河川跡 (SW) と不明遺構 (SX) について (図5・6・18・19参照)

SW1-N・S (図5・図6・図18)

地山上面で検出された河川跡である。地山上面から約70cm下まで掘り下げたが川底は確認できなかった。遺物は出土しなかった。縄文の生活面の下の層で検出されたことから、縄文の生活が営まれる前の時代の河川跡だと判断する。また堆積する礫の直径は小さく、上層で1cm程度、下層で1~3cm程度、例外的に5cm大の礫が混じるといった

状況である。また調査区西壁土層断面図にもSG1河跡が認識できる。

SX1～SX4

縄文の生活面ではなく、その上の基本層序の2層、整地層の上面から掘り込まれた遺構である。覆土も基本層序2層の土質に準じる。SX1を半蔵したが遺物は出土しなかった。類似するSX1からSX3を置賜農業高等学校に関する近現代遺構だと判断した。SX4は近現代の木の植栽痕だと判断する。

SX5（図19）

調査区中央の西側で検出された黒色土（クロボク土）の広がり。遺構検出面における平面形状から住居の可能性を想定してトレンチ2（TR2）を設定した。遺物は出土せず、壁面が緩やかで形状もはっきりしないことから自然地形の斜面であると判断した。縄文時代の遺構が設けられる以前に存在した旧地形の窪みだと考える。

SX6（図19）

調査区南東角で検出された黒色土（クロボク土）の広がり。遺構の平面形状から住居の可能性を想定してトレンチ3（TR3）とトレンチ4（TR4）を設定した。両トレンチ共に遺物は出土せず壁面は緩やかで住居にしては深すぎるところから、縄文時代の遺構が設けられる以前に存在した旧地形の斜面であると判断した。

4-4. その他 単独トレンチ（TR）と調査区壁について（図5・図19参照）

TR1（図19）

調査区の南より、東側の旧表土層（覆土）に設定した120×250cmのトレンチ。旧表土層が含む土器破片の量を確認するために地山直上まで掘り下げる。1×32×18cmの土器の小破片が1点出土し、旧表土層が含む遺物の量が少ないことがわかった。また現表土除去の際に廃土から採取できた遺物量は、土器の小剥片が42点、内口縁部3点、底部3点。頁岩の中剥片4点、内1点がメノウ。中剥片5点、中縫3点であった。このような遺物量と比較すると、B群、C群の土壤から出土した遺物量は掘削土量に対して多く、遺構から出土する遺物が旧表土からの流れ込みではなく、人為的に投入された可能性が高いと考えられた。

調査区東壁（図5参照）

調査区東壁における基本層序の3層直上で頁岩の中剥片が1点採取された。3層の上面は縄文期の生活面だと想定される。

5. まとめ

本調査のデータを検討することで次のようなことがいえる。

調査区全体にクロボク土の堆積層が確認できた。縄文時代の遺構の覆土にもクロボク土が多く混入し、基本層序からはクロボク土の上面が遺構を検出できる縄文期の生活面だったことが理解できる。近年、山野井徹氏がクロボク土について縄文人が植物を焼き払った痕跡だという説を提示している。また当調査では遺構確認面より下の地山層にSW1として調査した河川跡を検出した。調査区全体の地山はSW1を中心に礫層、砂層、シルト層といった水性堆積物によって構成されていることから、当地は人類が活動を始める以前の河川堆積によって基盤が築かれ、その河川の消滅以後、森林化したところを縄文人が焼き払い生活空間を確保した場所だったことが推定できた。

検出した遺構と、遺構から出土した遺物の分析から次のようなことが分かった。遺物が出土する遺構と出土しない遺構を明確に分類できる。遺物が出土する遺構は土壙だけである。本報告では土壙をA～C群に分類した。調査の結果A群6基、B群18基、C群3基、不明2基の土壙を検出した。A群は遺物が1点も出土せず、B群とC群から遺物が出土する。遺物が出土したB群土壙は13基、C群3基である。さらにB群土壙内の3基を近現代の遺構だと判断したので、これを除外して分析すれば、B群土壙15基中13基から、つまり全体の86%から遺物が出土した。C群土壙は全遺構、つまり100%出土している。6基のピットと河川跡であるSW1から遺物は出土しなかった。出土した遺物は土器片が主体である。ただし小破片が多く接合率が低い。SK29から出土した土器片に全体の約20%程度まで復元できたものがあるが、これが最高の復元率である。また1つの遺構から複数の個体の破片が出土する傾向がある。つまり複数の土器の部分的な破片が同じ遺構から出土している。また異なる遺構間で接合する土器片は確認できなかつた。

B群についてはごみを捨てる廃棄土壙、C群については貯蔵穴の廃止に伴い廃棄土壙に転用したという解釈が一般的だろう。当地の縄文時代の物資の廃棄システムが不明な状況下であるため、現代的な視点をもって検討することになるが、土器が生活の中で作為的もしくは無作為的に破碎し、その破片を不用物として単純に土壙へ廃棄した場合、このような出土傾向を呈するのは不自然だと考える。単純に土壙へ廃棄したのであれば、同じ遺構から出土した土器片の接合率と復元率は高い数値にならなくてはならない。それが一つの遺構からある土器の一部分しか出土しない、さらに複数の個体の土器の破片が出土するという状況を説明するには、何らかの解釈が必要になる。生活面に土器の破片が散乱しており、それが遺構の廃止と共に流れ込む、という状況を想定できないことはTR1の調査結果で述べた。加えてSK10とSK11においてA群土壙とB群土壙の切り合いが理解できる。A群のSK10がB群のSK11に切られており、本調査区でこの新旧関係が普遍的に通じるならば、B群が古くA群が新しい時期の遺構だと考えることができる。B群より新しいA群遺構から遺物が全く出土しないというデータも、流れ込みという説明でこの遺物の出土傾向を解釈できないことを支持する。

遺構から出土した頁岩はほぼ全て石器の生産工程で出たとみられる剥片である。道具と認識できる石器はSK15から出土した搔器だけだが、これも割れたものである。また磨製石斧、敲石に類する道具礫についても割れた遺物ばかりが出土した。また破碎繩の多くに被然した痕跡が見られ、調理などの道具として使用し、熱によって割れた繩である可能性が考えられた。つまり石器・繩類についても土器と同様、剥片や割れたもの、もしくは割ったものが出土している。割れた石器・繩類についても遺構から出土するのは一部分だけで残りは出土しない。

当遺跡で出土する一定度を超える大きさの繩は人為的に持ち込まれた可能性が高いことを前述した。この繩の中には、珪化木、赤石、メノウ、黒曜石など、色や質に特徴があるものもみられ、やはり人による選択の可能性が提示できる。ただし人為的な加工痕や使用痕は確認できないため、遺物として確定することは難しい。本報告ではこれらの繩を積極的に遺物として扱うことで分析を進めている。このような繩=石の出土状況からは、石には石器原料としてだけではなく原石のままの使用目的があった可能性も考えられる。

以上の検討から本遺跡の遺構と遺物の出土状況の解釈について、意図的に複数の遺物の破片と特徴的な繩を選択して、遺構に埋める人類活動の存在を提示したい。遺構の廃止に伴う活動か、何らかの有機物の埋納に伴う活動なのか、道具の廃棄自体に伴う活動なのかを理解することはできないが、当報告データから「壊れた、もしくは破壊した複数の道具の破片を意図的に1つの遺構にまとめて埋める」という行為を復元することが可能だと考える。

遺跡の時期については出土した土器から推定することができる。大木10式新段階、称名寺式・袖窓式に平行する土器、三十稻場式土器だと認識される破片が出土していることから、当遺跡は縄文時代中期末葉から後期初頭を中心とした縄文時代の村の一部であったことが推定できる。破片が多くて確定は難しいが縄文後期前葉と見られる土器片もあり、この時期までを含んだ理解が適切だと考える。

また当遺跡で三十稻場式土器が出土していることにも注目したい。三十稻場式土器は新潟県長岡市にある国史跡の

三十編場遺跡を標識とする縄文後期初頭に位置付けられる土器である。蓋が作られる点でも特徴的な土器型式である。本来は新潟の信濃川と阿賀野川流域の遺跡に集中して出土する。このような土器が出土するということは、当地と新潟の間に縄文時代から何らかの交流があったことに言及できる。ただし三十編場式土器はすでに米沢市の大樽遺跡や長井市の中里B遺跡などからも出土例があり、新潟との交流は飯豊町に限定したものではなく、置賜全域にあったと理解できる。飯豊町教育委員会が平成28年度に実施した分布調査で、新潟に通じる宇津岬の頂上付近から貝岩の剥片と土器片が出土した。遺物量は少なく、縄文期の明確な遺構が確認できなかったことから、居住地だとは認識できなかつたが、このような三十編場式土器の出土を交えて考えるならば、宇津岬から出土した遺物は置賜と新潟を結ぶ経路に設けられた交流の痕跡であった可能性として理解することもできるかもしれない。

参考文献

- 相原淳一「東北地方における縄文時代中期末葉から後期前葉に関する土器編年—宮城県石巻市山居遺跡の調査成果から—」(「東北歴史博物館研究紀要10」東北歴史博物館、平成21年3月)
- 飯豊町教育委員会「山形県飯豊町荻生石箱遺跡—第一次発掘報告書—」(飯豊町教育委員会、1980年3月)
- 飯豊町教育委員会「平成28年度飯豊町遺跡発掘調査報告書(2) 飯豊町教育委員会埋蔵文化財調査報告書第6集」(飯豊町教育委員会、2017年3月)
- 飯豊町史話会「飯豊町町制施行五十周年記念 飯豊町宝物百選」(飯豊町史話会、平成20年8月)
- 小林圭一「縄文時代中期「小梁川・大梁皮編年」に関する覚書」(『研究紀録16』東北芸術工科大学東北研究センター、2017年3月)
- 音原哲文「山形県における縄文時代中期の土器様相—中期後半の編年を中心として—」(『山形考古』第6巻第3号(通巻29号)、1999年6月)
- 秦昭繁「飯豊町高野の鏡石といわれる黒曜石」(『さあべい』第26号、2010年5月)
- 秦昭繁「米沢市成島遺跡出土の黒曜石石器の石材产地」(『さあべい』第29号、2104年5月)
- 長井政太郎「中津川村の概況」「村史なかつがわ」(中津川村史編さん委員会、1960年11月)
- 山形県教育委員会「群の神遺跡・周辺遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財調査報告書第23集、山形県教育委員会、昭和54年3月)
- 山形県教育委員会・山形県埋蔵文化財緊急調査団「町下遺跡調査説明資料」(山形県教育委員会、昭和56年)
- 山形県・山形県教育委員会「町下遺跡発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財調査報告書第57集、山形県教育委員会、昭和57年3月)
- 山形県教育委員会・山形県埋蔵文化財緊急調査団「赤岩遺跡調査説明資料」(山形県教育委員会、平成元年)
- 山形県教育委員会・山形県埋蔵文化財緊急調査団「郡之神遺跡 調査説明資料」(山形県教育委員会、平成4年)
- 山形県・山形県教育委員会「群の神遺跡第2次発掘調査報告書」(山形県埋蔵文化財調査報告書第191集、山形県教育委員会、平成5年3月)
- 山形県教育委員会・山形県立博物館「白川ダム水没遺跡発掘調査報告書数馬遺跡」(山形県教育委員会、1973年)
- 山野井徹『日本の土 地質学が明かす黒土と縄文文化』(柴地書館、2015年)

裏山 I 遺物一覧表

番号	種別	器種	遺構	備考	番号	種別	器種	遺構	備考
H27-A	縄文土器	深鉢	TR-G	中期末～後期前葉？	29	縄文土器	不明	SK12	口縁部
H27-B	縄文土器	不明	TR-G	口縁部	30	縄文土器	深鉢	SK12	胴部、大木10式新段階？
H27-C	縄文土器	不明	TR-G	口縁部、大木10式新段階？	31	縄文土器	深鉢	SK12	胴部、中期末？
H27-D	縄文土器	不明	TR-G	口縁部、大木10式新段階？	32	縄文土器	深鉢	SK12	胴部
1	石器	磨製石斧	SK5	基部、刃部欠損	33	縄文土器	不明	SK12	胴部
2	縄文土器	浅鉢	SK5	称妙寺式・袖窓式並行	34	縄文土器	不明	SK12	胴部
3	縄文土器	深鉢	SK5	口縁部	35	縄文土器	不明	SK12	口縁部
4	縄文土器	深鉢？	SK5	胴部、三十稜場式	36	縄文土器	不明	SK12	口縁部
5	縄文土器	深鉢	SK8	橋状取手有り、後期前葉頃	37	縄文土器	深鉢	SK12	底部
6	縄文土器	不明	SK8	口縁部	38	縄文土器	深鉢	SK12	中期末～後期初頭？
7	縄文土器	深鉢	SK8	大木10式新段階～後期初頭	39	禋	敲石	SK12	欠損
8	縄文土器	深鉢	SK8	大木10式新段階～後期初頭	40	縄文土器	不明	SK15	口縁部
9	縄文土器	深鉢	SK8	胴部	41	縄文土器	深鉢	SK15	口縁部、称名寺式・袖窓式並行
10	縄文土器	不明	SK8	口縁部	42	縄文土器	深鉢	SK15	口縁部、称名寺式・袖窓式並行
11	縄文土器	蓋形土器	SK8	穿孔有り	43	禋	不明	SK15	破損、端部に打ち付け痕あり
12	縄文土器	蓋形土器	SK8		44	禋	敲石	SK15	欠損
13	禋	深鉢	SK8	口縁部	45	禋	敲石	SK15	欠損
14	禋	深鉢	SK8	大木10式新段階～後期初頭	46	石器	搔器	SK15	欠損
15	禋	不明	SK8	胴部、後期初頭～前葉	47	禋	不明	SK16	被熱痕有り
16	禋	深鉢？	SK8	口縁部	48	禋	不明	SK22	確岩
17	縄文土器	敲石	SK8	欠損	49	縄文土器	不明	SK22	口縁部、突起有り
18	禋	不明	SK8		50	禋	石皿	SK23	表面に凹み有り
19	縄文土器	円盤状石器	SK9		51	縄文土器	深鉢？	SK27	口縁部、三十稜場式
20	禋	敲石	SK9	欠損	52	縄文土器	深鉢？	SK27	口縁部、三十稜場式
21	縄文土器	浅鉢	SK9	称名寺式・袖窓式並行	53	縄文土器	蓋形土器	SK27	三十稜場式
22	縄文土器	深鉢	SK9	称名寺式・袖窓式並行？	54	縄文土器	蓋形土器	SK27	三十稜場式
23	縄文土器	深鉢	SK9	称名寺式・袖窓式並行	55	縄文土器	不明	SK29	底部
24	縄文土器	深鉢	SK9	称名寺式・袖窓式並行	56	縄文土器	深鉢？	SK29	胴部、後期初頭
25	縄文土器	深鉢	SK12	口縁部、中期末？	57	縄文土器	不明	SK29	口縁部
26	縄文土器	深鉢	SK12	口縁部	58	縄文土器	深鉢？	SK29	口縁部、三十稜場式
27	縄文土器	深鉢？	SK12	口縁部	59	縄文土器		SK29	口縁部、後期初頭
28	縄文土器	深鉢？	SK12	口縁部					

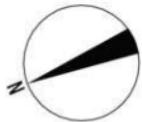
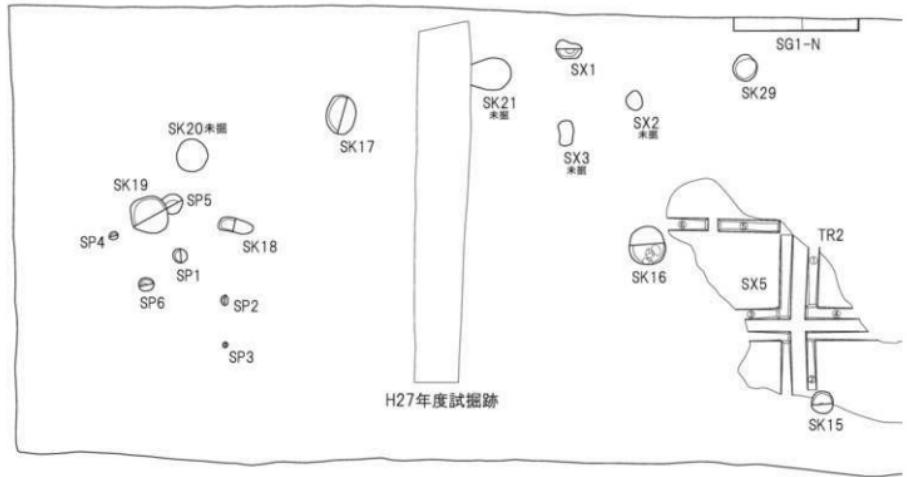
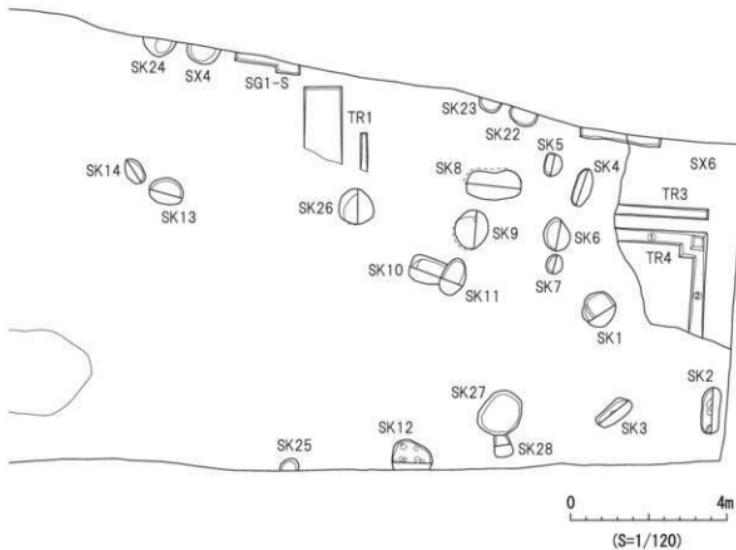
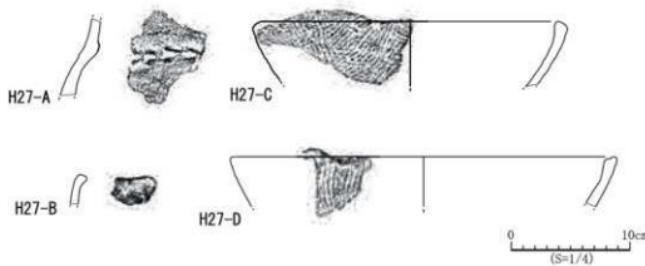


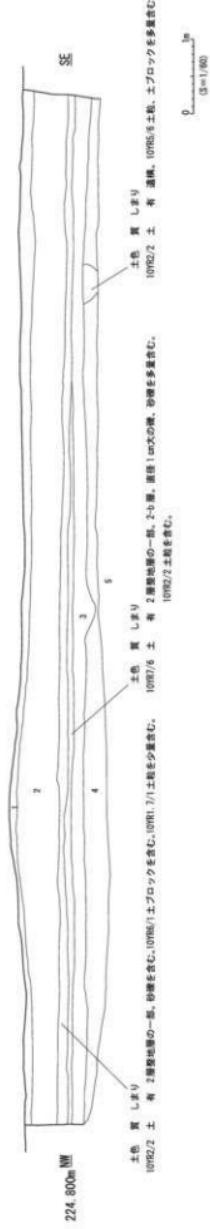
図3 裏山I遺跡調査区平面図



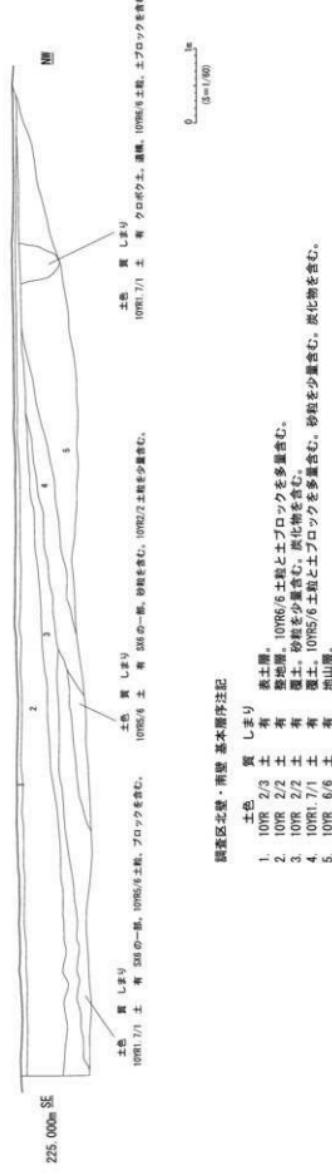
平成27年度試掘調査出土遺物 (SK8付近採取)



調査区北壁



調査区南壁



調査区北壁・南壁 基本層序注記

1. 10R 2/3 土 有 35cm一帯。10R6/6 土塊と土ブロックを多量含む。
2. 10R 2/2 土 有 砂地層。
3. 10R 2/2 土 有 蓄土。砂粒を少量含む。炭化物を含む。
4. 10R 1/1 土 有 10R6/6 土塊と土ブロックを多量含む。砂粒を少量含む。炭化物を含む。
5. 10R 6/6 土 有 地山層。

図 4 富山I遺跡調査区北壁・南壁土層断面図

壁東区検査

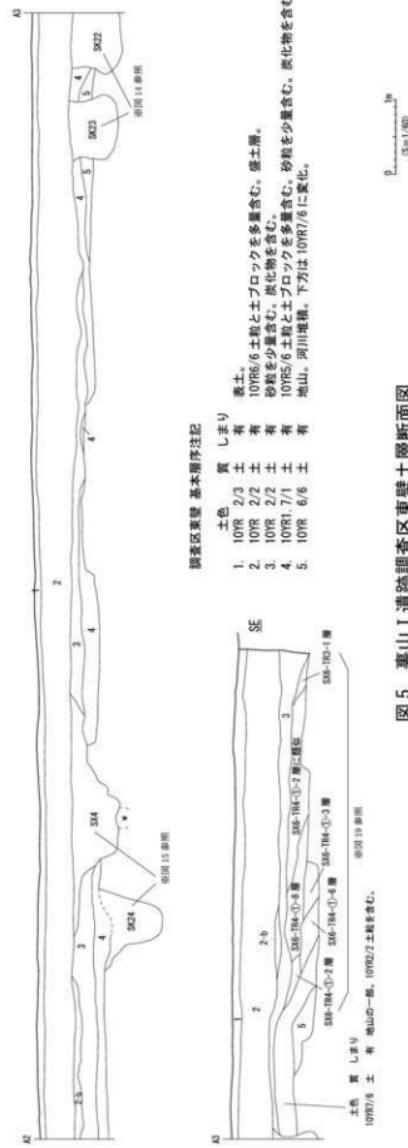
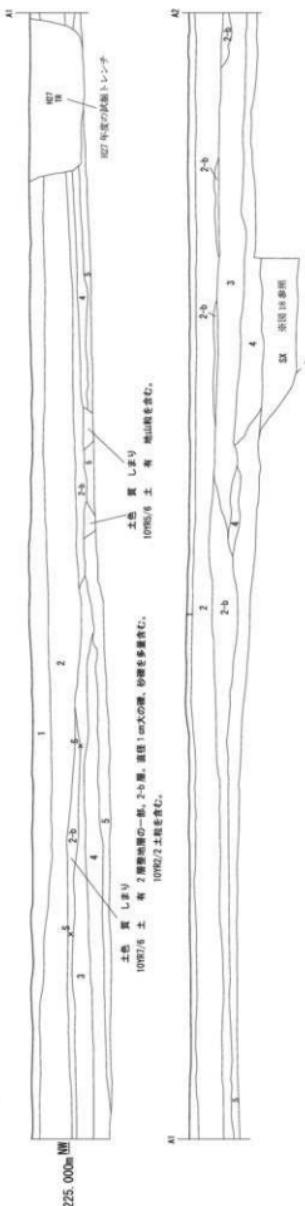


図5 製出I調査区東壁土層断面図

壁區調查

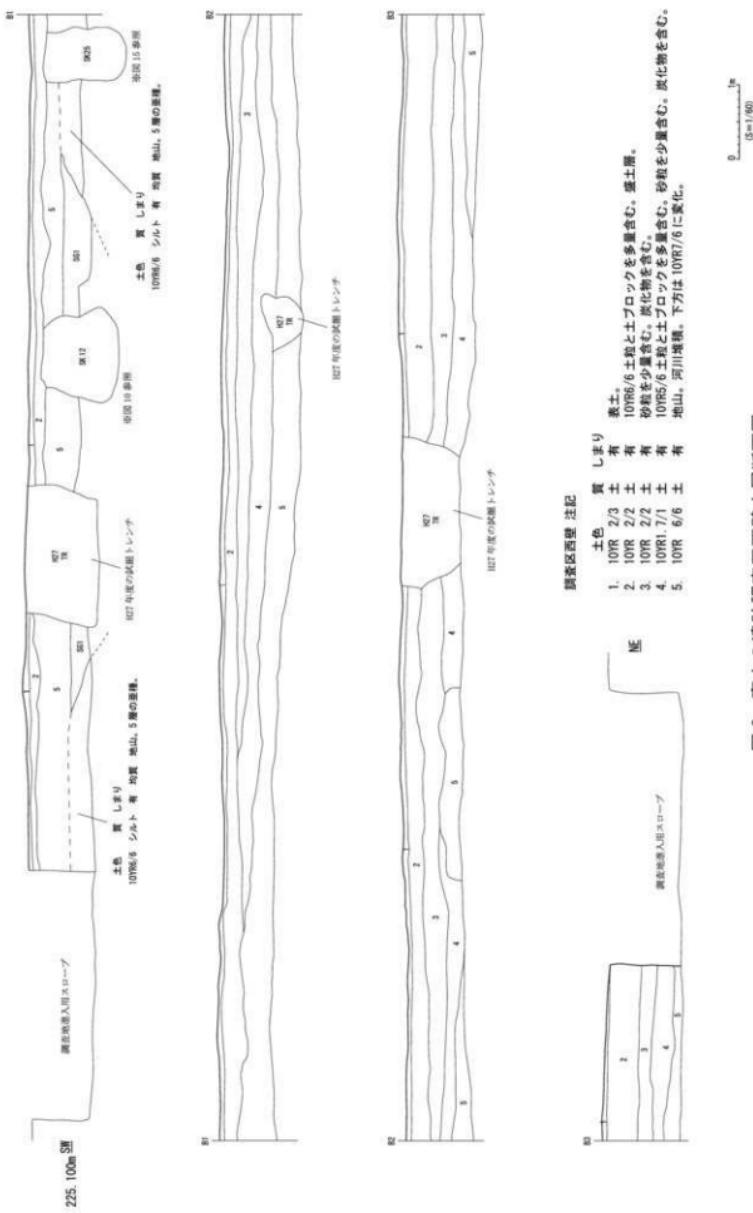
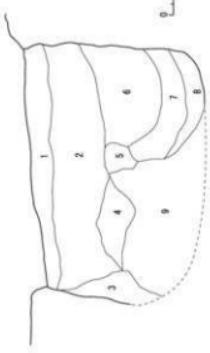
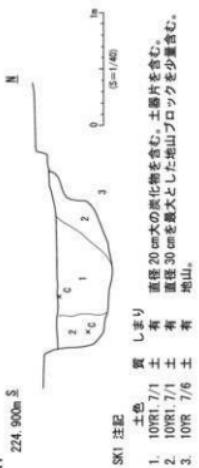


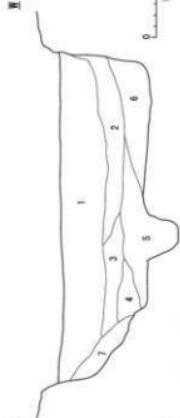
図6 裏出I 遺跡調査区西壁主層断面図

SK3
224.900m S



SK2

224.900m E

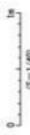
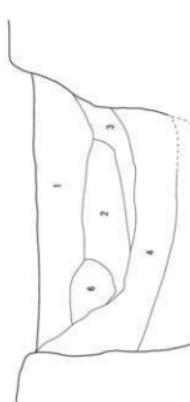


SK3 注記

1. 10R 7/1 土 有
2. 10R 7/1 土 有
3. 10R 7/1 土 有
4. 10R 6/6 地山ブロックを少量含む。
5. 10R 5/6 土 有
6. 10R 5/2 シルトブロックを含む。
7. 10R 7/1 土 有
8. 10R 7/1 土 有
9. 10R 6/4 土 有
10R 6/4 地山ブロックを少量含む。

SK4

224.900m SE



SK7



SK6



SK5



SK4



SK3

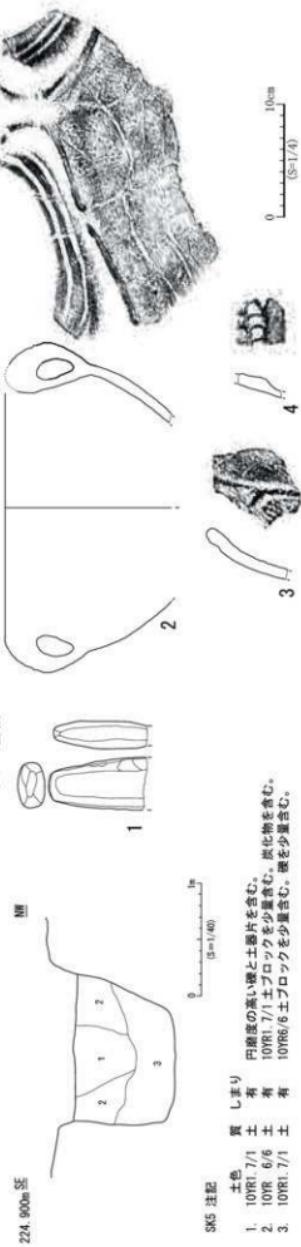


図 7 裏山 I 遺跡 遺構土層断面図

SK5

224.900m SE

SK5 出土遺物



0
(S=1/4)
10cm

SK8

225.000m SE

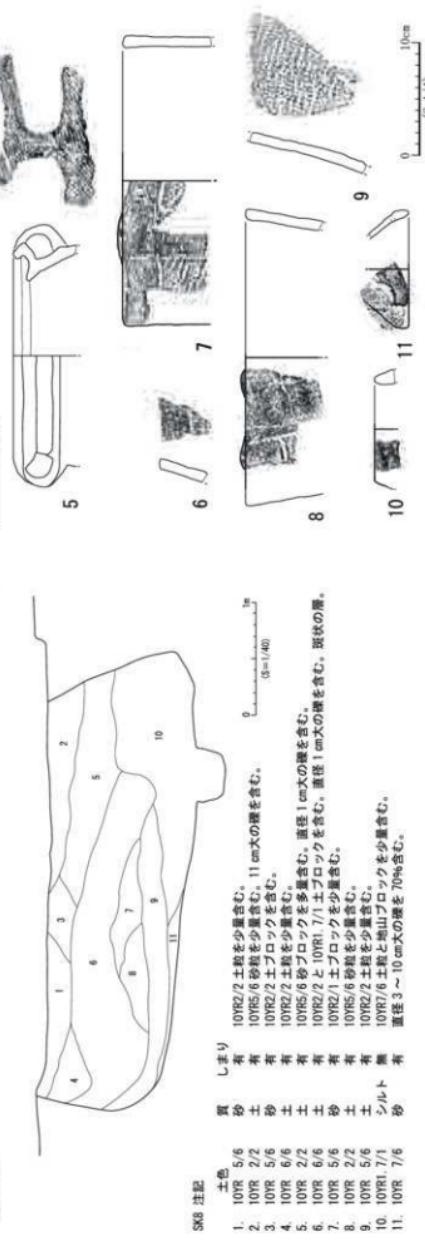
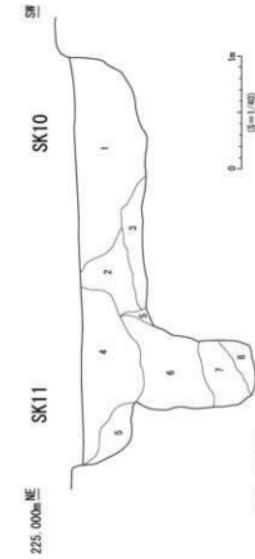


図 8 墓山 I 遺跡 遺構層断面図・出土遺物



SK10 注記

SK12 注記

層	土色	質	しまり
1.	10R 2/3	土	有
2.	10R5/6 土粒と土ブロックを含む。	土	有
3.	10R 5/6	土	有
4.	10R 5/6	土	有
5.	7.5R 5/6	砂	有
6.	10R 2/2	土	有
7.	10R 2/2	土	有
8.	10R 4/6	土	有
9.	10R 4/6	土	有
10.	10R 2/2	土	有
11.	10R 5/6	土	有
12.	10R1.7/1	土	有
13.	10R 7/6	土	有
14.	7.5R 2/2	シルト	有
15.	10R1.7/1	土	有
16.	10R 2/2	土	有

10R/2 土粒と土ブロックを含む。
10R/6 土粒を少量含む。
10R/2 土粒と土ブロックを含む。
10R/2 土粒と土ブロックを含む。
10R/2 土粒と土ブロックを含む。
10R/2 土粒と土ブロックを含む。
10R/6 土粒を少量含む。
10R/2 土粒と土ブロックを含む。
10R/6 土粒を少量含む。
10R/6 土粒を少量含む。

図 10 裏山 I 遺跡 遺構土層断面図



SK12 出土遺物

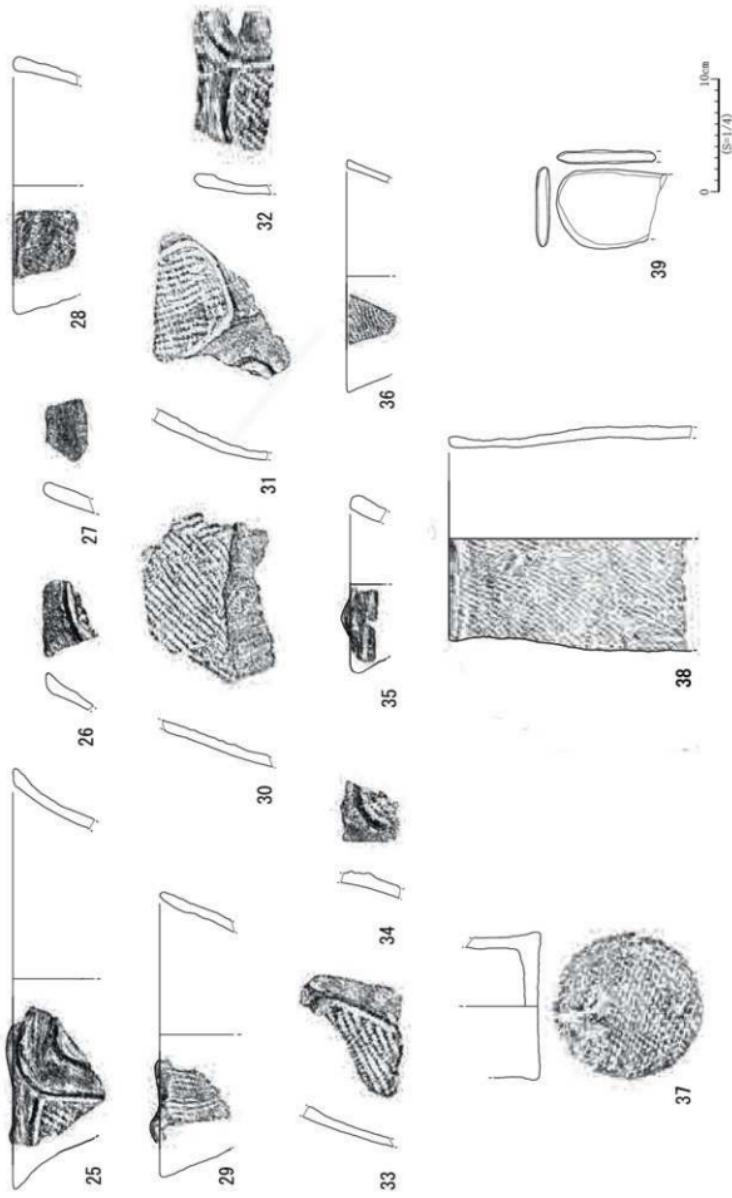
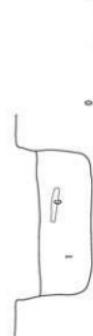


圖 11 裏山 I 遺跡 出土遺物

25
SK15
224.900m S

SK17
224.900m E

N

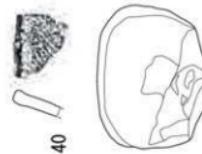


SK15注記

1. 土色
10YR 7/1 土 質 しまり
土器片を含む。直徑20cmの大円錐底の高い石を含む。
2. 10YR 7/4 土 有 地山。

1. 土色
10YR 7/2 土 質 しまり
地山由来の土。10YR 2/2 土 質 無
10YR 6/6 土質と大形の土ブロックを少量含む。
地山底を少量化した。木の皮が出土する。

SK15出土遺物



SK17注記

1. 土色
10YR 6/6 土 質 しまり
地山由来の土。10YR 2/2 土 質 無
10YR 6/6 土質と大形の土ブロックを少量化した。
木の皮が出土する。

図12 壱山I遺跡 造構土層断面図・出土遺物

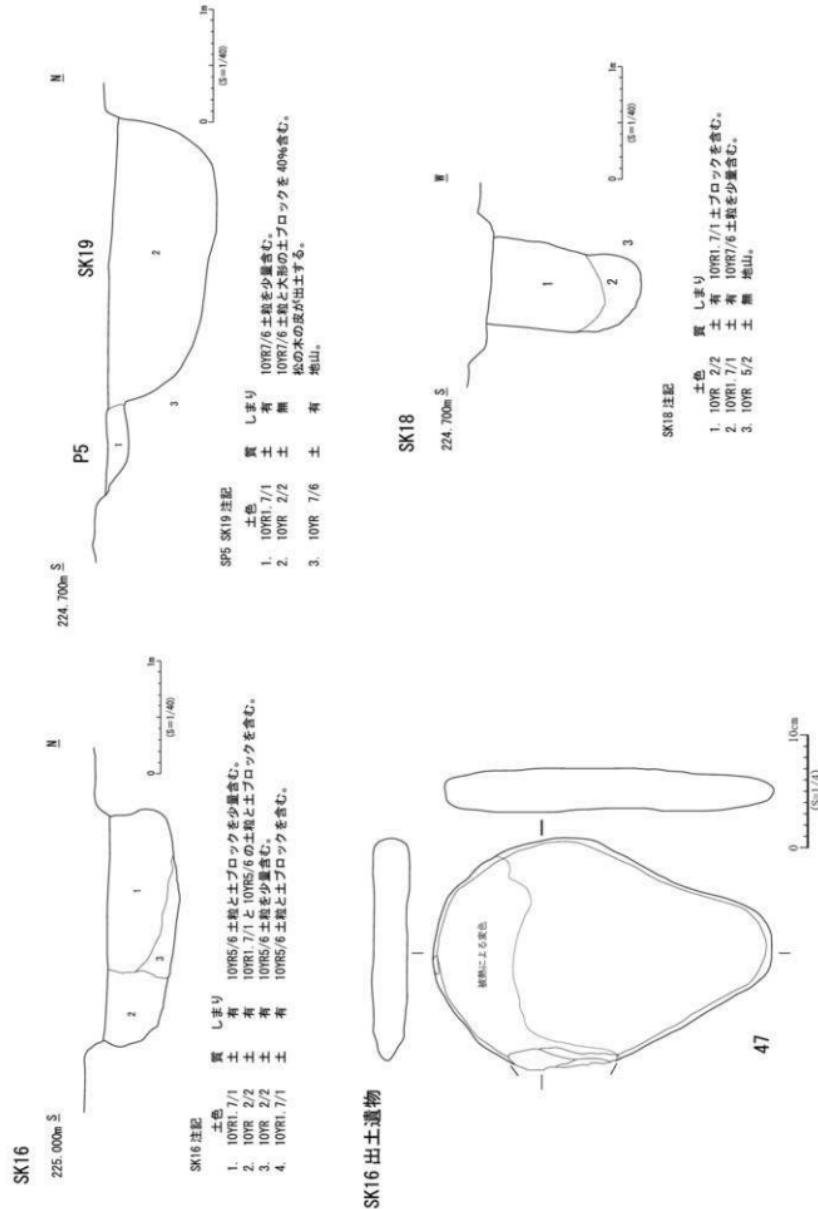
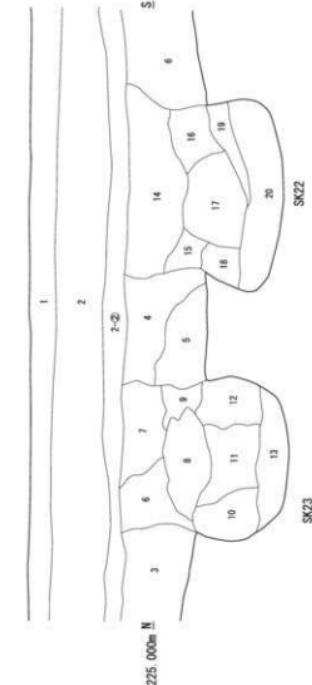


図13 裏山I遺跡 遺構土層断面図・出土遺物

SK22 SK23

SK22 SK23 注記



1. 10R 2/3 土 質 しまり
有
底土層。
地山由来の 10R5/6 土粒と土ブロックを多量含む。
炭化が進む。

2. 10R 3/3 土 有
炭化が進む。
直径 1cm 大の塊と砂粒を含む。河川堆積。

3. 10R 5/6 土 有
有
直径 1cm 大の塊を含む。河川堆積。

4. 10R 5/6 土 有
有
直径 1cm 大の塊と砂粒を含む。河川堆積。

5. 10R 5/6 砂 有
有
直径 1cm 大の塊を含む。河川堆積。

6. 10R 2/2 土 有
有
直径 1cm 大の塊を少量含む。10R5/6 地山崩れを少量含む。

7. 10R 2/2 土 有
有
直径 1cm 大の塊を少量含む C. 10R5/6 地山崩れを少量含む。

8. 10R 5/6 土 有
有
10R2/2 土粒と少量含む。地山由来の層。

9. 10R 2/2 土 有
有
10R5/6 土粒と少量含む。地山由来の層。

10. 10R 2/2 土 有
有
10R6/6 土粒と土ブロックを多量含む。砂粒を少量含む。

11. 10R 2/2 土 有
有
10R5/6 土粒と少量含む。砂粒を少量含む。

12. 10R 2/2 土 有
有
10R6/6 土粒と少量含む。砂粒を少量含む。

13. 10R1.7/1 土 有
有
10R6/6 土粒と少量含む C.

14. 10R 2/2 土 有
有
直径 1cm 大の塊を少量含む C. 10R6/6 地山崩れを少量含む。

15. 10R 2/2 土 有
有
10R6/6 地山崩れを少量含む。砂粒を少量含む。

16. 10R 2/2 土 有
有
10R6/6 地山崩れを少量含む。

17. 10R 5/6 土 有
有
10R2/2 土粒と土ブロックを少量含む。

18. 10R 2/2 土 有
有
10R6/6 地山崩れを少量含む。

19. 10R 2/2 土 有
有
10R1.7/1 土粒と土ブロックを少量含む。

20. 10R1.7/1 土 有
有
10R6/6 土粒と土ブロックを少量含む。

SK23 出土遺物



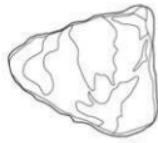
50

0 10cm
(3=1/4)

SK22 出土遺物



48

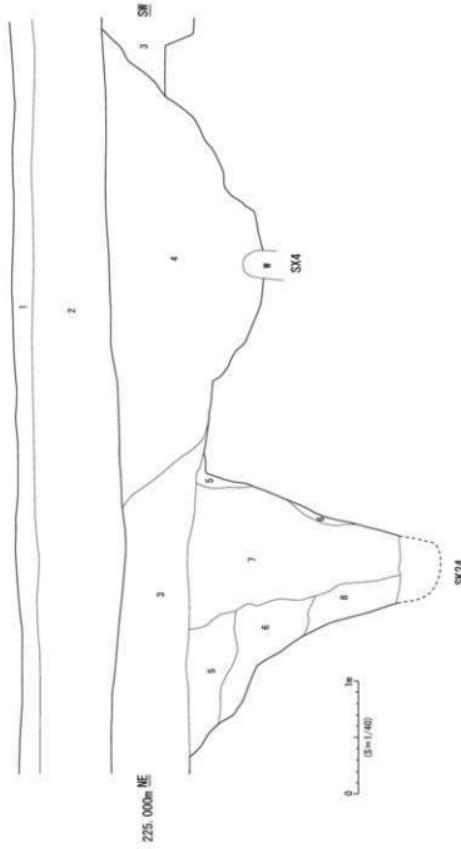


49

0 10cm
(3=1/4)

図 14 壱山 I 退跡 退耕土層断面図・出土遺物

SK24



SK25

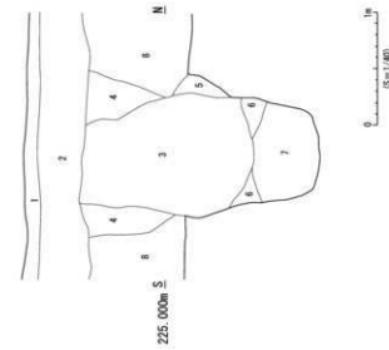
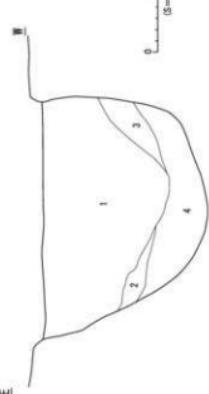


図 15 裏山 I 遺跡 週構土層断面図

225.000m E



SK26 注記

- 土色
1. 10R1.7/1 土 細砂
2. 10R 4/6 砂 粗
3. 10R 5/6 砂 粗
4. 10R1.7/1 土 直径 1cm 大の塊を少量含む。
- 直徑 1cm 大の塊を少量含む。
直徑 1cm 大の塊を少量含む。C.
直徑 1cm 大の塊を少量含む。C.

225.000m S



SK27 注記

- 土色
1. 10R1.7/1 土 有
2. 10R 2/2 土 有
3. 10R 7/6 土 有
4. 10R 7/6 土 有
5. 4層に同じ。
6. 10R 2/2 土 有
7. 10R 5/6 土 有
- 直徑 1cm 大の塊を少量含む。
直徑 1cm 大の塊を少量含む。C.
直徑 1cm 大の塊を少量含む。C.
- 直徑 1cm 大の塊を少量含む。

SK27 出土遺物



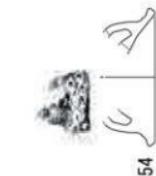
52



51



53



54

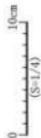
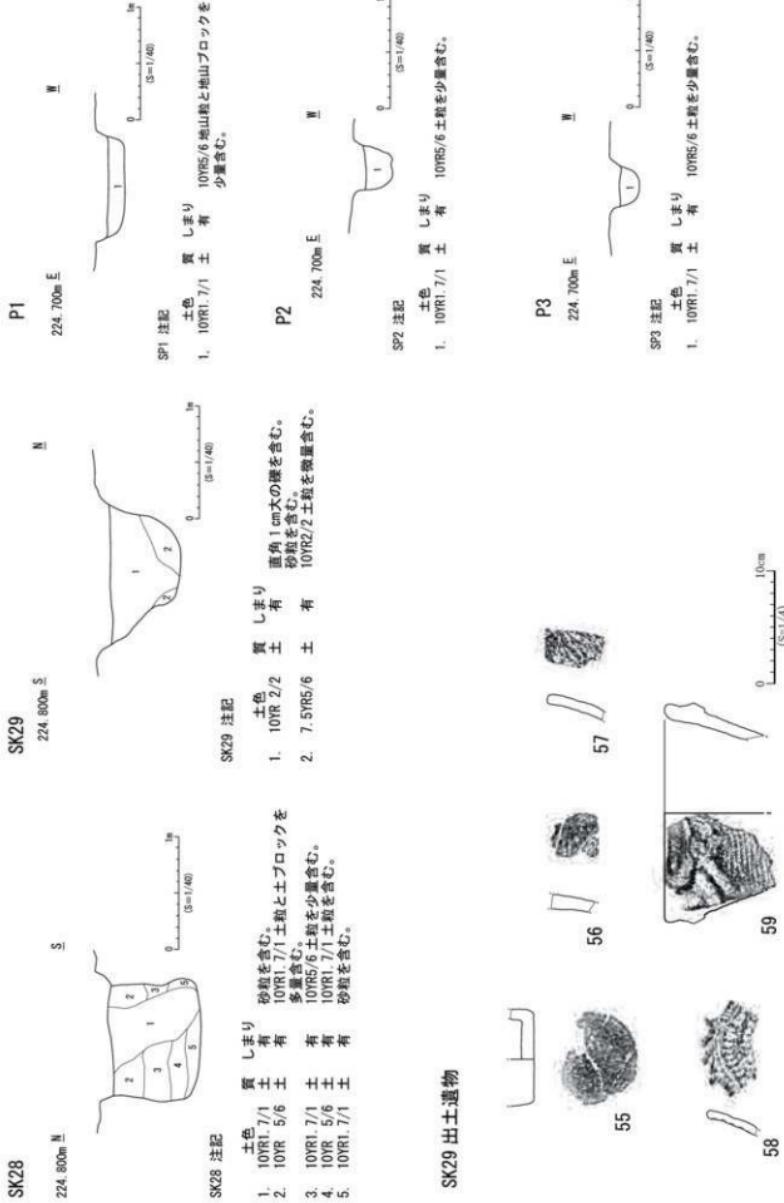


図 16 裏山 I 遺跡 遺構土層断面図・出土遺物

図17 萩山I遺跡 遺構土層断面図・出土遺物



P4
224.700m S

N



P6
224.700m S

N



SH1-N 注記 土色 肌 しまり 1. 10R2/3 土 有 有 地山由来の 10R5/6 土粒、土ブロックを多量含む。炭化物が混じる。漂土層。
2. 10R2/3 土 有 有 直径 5 mm 大の礫を含む。炭化物を少量含む。有機地盤層（褐色以降、現状）。
3. 10R5/3 土 有 有 土粒と土ブロックを含む。炭化物を含む。地山層と地山層ブロックを含む。
4. 10R2/2 土 有 有 土粒と土ブロックを含む。炭化物を含む。地山層と地山層ブロックを含む。
5. 10R2/2 土 有 有 直径 1 cm 以下の礫層。砂を 40% 含む。
6. - 漂 有 直径 5 cm を最大とし、3 ~ 1 cm を中心とした礫層。砂を 30% 含む。
7. - 漂 有 直径 1 cm 大の礫を少量含む。
8. 10R5/6 砂 有

SH1-S 注記 土色 肌 しまり 1. 10R 2/2 土 有 有 砂粒を含む C。
2. 10R 4/3 砂 有 10R2/2 土粒を少量含む。砂粒を含む C。
3. 10R 4/4 砂土 有 (ほぼ均質)。
5. 10R 5/6 砂 有 (ほぼ均質)。
6. 10R1.7/1 土 有 有 均質、地山。
7. 2.51 5/3 シルト 有 砂粒を微量含む。

SH1-S 注記 土色 肌 しまり 1. 10R 2/2 土 有 有 砂粒を含む C。
2. 10R 4/3 砂 有 10R2/2 土粒を少量含む。砂粒を含む C。
3. 10R 4/4 砂土 有 (ほぼ均質)。
5. 10R 5/6 砂 有 (ほぼ均質)。
6. 10R1.7/1 土 有 有 均質、地山。
7. 2.51 5/3 シルト 有 砂粒を微量含む。

SH1-S 注記 土色 肌 しまり 1. 10R 2/2 土 有 有 砂粒を含む C。
2. 10R 4/3 砂 有 10R2/2 土粒を少量含む。砂粒を含む C。
3. 10R 4/4 砂土 有 (ほぼ均質)。
5. 10R 5/6 砂 有 (ほぼ均質)。
6. 10R1.7/1 土 有 有 均質、地山。
7. 2.51 5/3 シルト 有 砂粒を微量含む。

図 18 裏山 I 遺跡 造構土層断面図

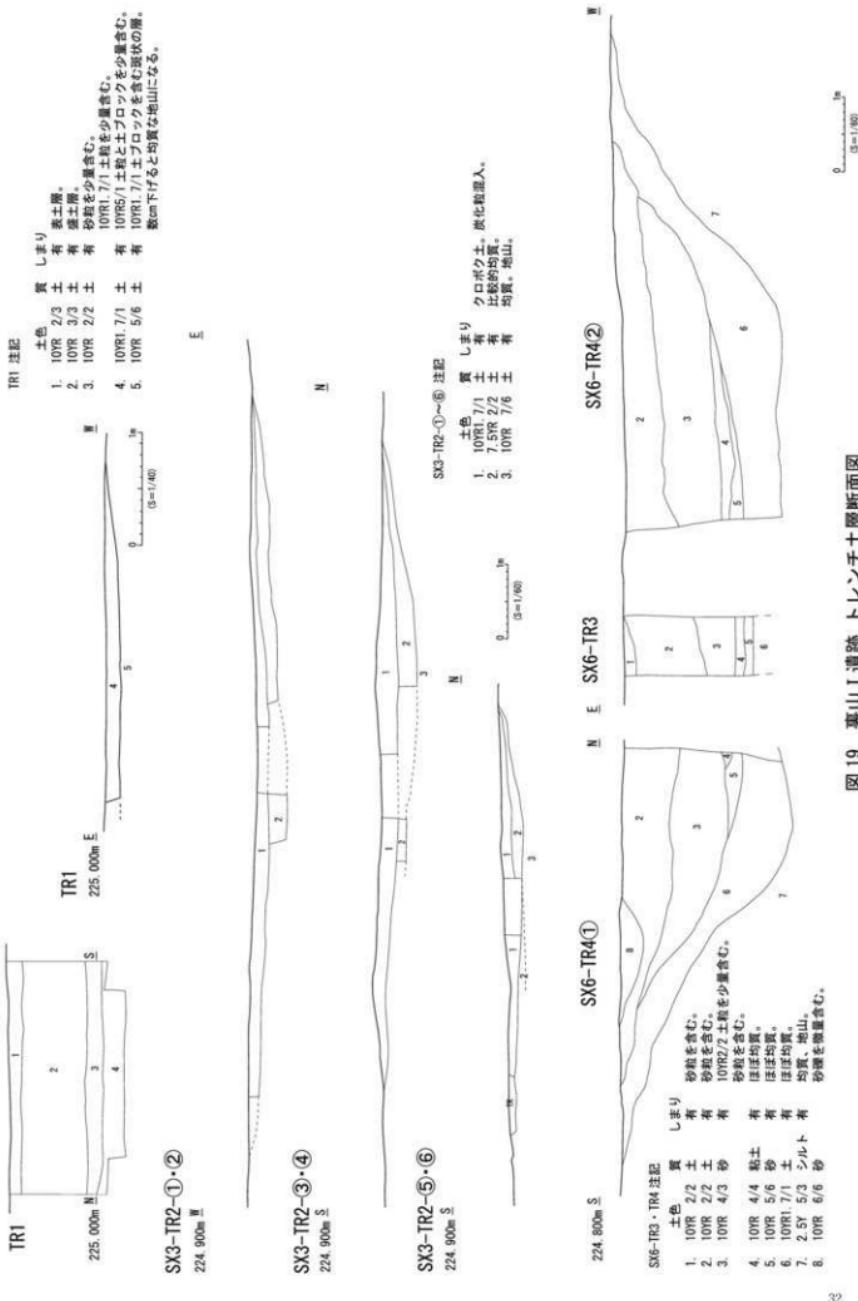


図19 裏山I遺跡 トレンチ土層断面図

報告書抄録

ふりがな	うらやまいちいせき はっくつちょうさほうこくしょ							
書名	裏山I遺跡 発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	飯豊町教育委員会埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第9集							
編著作者	高橋拓							
編集機関	飯豊町教育委員会							
所在地	山形県西置賜郡飯豊町大字椿 2888番地							
発行年月日	2019年3月31日							
ふりがな 調査地・遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うらやま 裏山 I 遺跡	やまとがたけん 山形県 にしあわただぐん 西置賜郡 いいだまち 飯豊町 あわあわきつばき 大字 椿 2888番地	403	058	38度02分23秒	139度59分21秒	2018年 5月 ～ 2018年 6月	800m ²	消防分署の 建設・宅地 造成



表土除去作業



遺構検出作業



遺構平隕作業



SK8・SK9・SK10・SK11



SK10とSK11の切り合い



SK12 土層断面



SK16 土層断面



SK22・SK23 土層断面

図版 1



SK24 土層断面



SK15 遺物出土状況



SX5 調査状況



SX11 完成状況



SX6 調査状況



SK12 完成状況



調査区北壁東端



調査区全景 南から

図版 2



調査区全景 北から



現地説明会



SK1 出土土器



SK6 出土土器



SK5 出土土器



SK5 出土石器・礫



SK8 出土土器



SK8 出土石器・礫

図版 3



SK9 出土土器



SK9 出土石器・骨



SK12 出土土器



SK12 出土石器・骨



SK14 出土土器



平成 27 年度試掘調査出土土器



SK15 出土土器



SK15 出土石器・骨

図版 4



SK16 出土土器



SK16 出土石器·砾



SK22 出土土器



SK22 出土石器·砾



SK23 出土土器



SK23 出土石器·砾



SK27 出土土器



SK27 出土石器·砾



SK29 出土土器



SK29 出土石器・石



図 8-1



図 8-2



図 8-5



図 8-7 その他



図 8-11・9-12

図版 6



図 9-18



图 9-21



图 9-23



图 9-24



图 11-25



图 11-37



图 11-38



图 12-41



图版 7

图 12-42



図 12-43



図 12-46



図 14-48



図 16-52



図 16-53



図 17-55



図 17-59



子供達の遺跡発掘体験事業

図版 8

